

数学者

藤原 正彦さん



2005年11月に刊行された著書『国家の品格』が200万部を超えるベストセラーとなった数学者・藤原正彦さん。数学者だが、エッセイストとしても人気を博している。意外にも論理よりも情緒が大切だと強調される。そんな藤原さんに、弁護士、司法という観点からお話を伺った。

(聞き手・構成：坂本慎二)

—写真、撮らせていただいてもよろしいですか。

はい、顔には自信ありますから（笑）。

—『国家の品格』は200万部を超えるベストセラーとなっていますが、どのような問題意識で書かれたのですか。

バブル崩壊後、日本では、市場経済に代表される欧米の論理にならい、改革イコール改善と勘違いして、自由競争、規制緩和といった改革を加速させてきました。

一言で言えばアメリカの真似ですよね。しかし、アメリカというのは全然違う言葉、習慣、風俗、思考、そういう人たちの集まりですから、それをまとめるために論理だけで成り立っているんです。アメリカというのは論理的整合性がびしっとしている。ところが、ヨーロッパもアジアも論理的整合性よりも慣習だとかそういうものを主にしているわけです。それなのに日本は、アメリカの一部だけを真似してしまった。論理的な整合性を持っている有機組織の一部だけを真似するということはある得ない、絶対うまくいかないんです。日本の最もすぐれた国柄が壊されてしまうという危機感を覚えますね。

—日本でも欧米にならって弁護士の増員が行なわれてい

ますが、これについてはどう思われますか。

市場原理でやろうということですね。しかし、アメリカ型で、なんでも訴訟ということになってしまいますよね。論理が幅を利かせていく。しかし、論理などというものはどうにでもなるものです。私のような数学者が言うのですから（笑）。

法律などというものは無いのが最も高貴な国なのであって、本当は人間の内側からくる道徳倫理によって行動を抑制することが大事です。卑怯なことはいけないとか、人を裏切ってはいけないとか、騙してはいけないとか、そういうことですね。

—日本はこれまでそうだったと？

例えば、16世紀、フランシスコ・ザビエルなどの宣教師たちが日本に来て、日本人ほど道徳倫理の高いものはないとびっくりしてイエズス会の本部に報告しています。日本人というのはあたかも生まれたときからそれが身についているかのように振る舞うと、それほどの国民なんですよ。

法律に書いていないことであれば何をしてもよいというような考えは日本人にはなじまないんですね。その日本の良さがグローバリズムの名の下に欧米の方向に統一

されてしまうというのを危惧しています。むしろ、日本がそういうものではないと教えてやらなければいけない。

——2009年からは裁判員制度が始まりますが、これについてはどうお考えですか。

裁判員制度もアメリカ型の仕組みの1つですよ。最初に申し上げたように、日本のような独自の歴史のある国では、単にアメリカの真似をするだけではうまくいかないと思います。感情にまかせて判断をするということだけは避けてほしいですね。

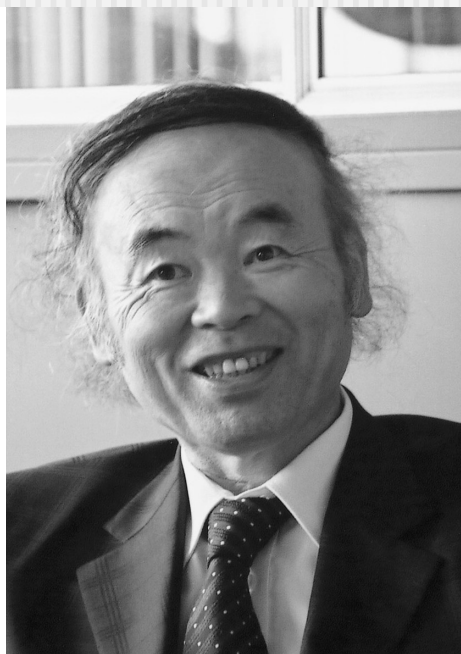
——司法を健全なものにするために法曹に必要な資質は何か。

やはり大局観とか人間としての情緒とかそういうものが大事ですね。そういうものはロースクールでテクニカルなことをちょっと勉強しただけでは身につかないんです。ただ法律だけを身につけて喧嘩の技術だけを勉強した人がどんどん実務をやると。これはもう日本の社会が変わってしまう、恐ろしいですね。しかし、そういう人は論理的には正しいことを言うんですよ。論理的に正しいと人間というのは脳細胞が気持ちいいんですね。だから、みんな信用してしまう。しかし、長期的にはうまくいきません。やはり長期的には大局観を持った人ですね。

その元になるものは何かというと、教養なんです。その教養というのは何かというと、文学とか思想とか歴史とか芸術とか何の役にも一見たちそうもないものがあるかどうか。「もののあはれ」があるか、美的感受性があるか、弱者に対する涙があるか、そういうものが根本的には人間を決めていくんです。したがって私は、法律家の人たちには教養をきちんと身につけて大局観を持った人になってほしいと思います。

——そのためには法曹になる前の教育も大切になりますね。

アメリカでは小中1万8000校で株式投資を教えているんですよ。そうすると、子どもたちがみんな新聞の経済欄に目を通す、社会に目が開かれたとアメリカの教育学者たちは自画自賛するんです。しかし、私はこういうのを「付ける薬がない」と言うんです。小学生が新聞の経済欄に目をやる必要などない、ましてや社会に目を開く必要すらない。子どものうちはきちんと国語をやって算数をやると、それだけで精一杯なんです。



「もののあはれ」があるか、美的感受性があるか、弱者に対する涙があるか、そういうものが根本的には人間を決めていくんです。

プロフィール ふじわら・まさひこ

1943年旧満州国新京生まれ。作家新田次郎・藤原てい夫妻の次男。68年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。理学博士。国内外の大学で研究や教育に従事して、現在、お茶の水女子大学理学部数学科教授。78年「若き数学者のアメリカ」（新潮文庫）で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。近著に「藤原正彦の人生案内」（中央公論新社）。研究論文・著書多数。ベストセラーになった「国家の品格」（新潮新書）から「品格」が2006年「ユーキャン新語・流行語大賞」（「現代用語の基礎知識」選）に選ばれた。

また、1カ国に留学先が偏ることの危険もありますよね。だいたい日本は7～8割がアメリカへ留学しますからね。アメリカ人というのはすべての人が欲求不満なんです。ここまで到達するとまたここに目標を作って命がけで頑張ると。アメリカはそれで良いのでしょうかけれど、日本人には合わないんですね。同じアングロサクソンの国でもイギリスは違います。もっと日本に近い国、例えばイギリスやドイツへも行った方がいいのではないかと思います。

——弁護士も士（侍）業であると言われますが、今後、弁護士に期待することはありますか。

やはり、武士道精神の中核にある「惻隠」、弱者への共感、思いやりというのが今後、世界的に非常に重要になってきます。こういう「惻隠」の情をきちっと持つと。これが世界で日本人だけの持ってきた非常に重要な資質、形ですからね。これを是非前面に出して行って、「この事務所は『惻隠』でいくんだ」と、こうやってくれたら世界に張り合うことができると思う。そして、それを世界に広めていってほしいですね。

——本日は、お忙しい中、示唆に富んだお話をありがとうございました。